留学報告

パリ・留学エッセイ

七條めぐみ　愛知県立芸術大学大学院音楽研究科（音楽学領域博士後期課程）

現在私は愛知県立芸術大学の博士後期課程に在籍しながら、同時にパリ＝ソルボンヌ大学の博士課程にも登録して、「コチュテル（博士論文共同指導）」という制度のもとで研究を行っています。2013 年 9 月からパリに来ており、フランス生活も早いもので半年が過ぎました。本稿では、コチュテルがスタートするまでの道のりと、いま私が行っている研究について紹介したいと思います。

1．協定の成立と 4 週間の短期留学

コチュテルとは、一つの博士論文を二つの大学で同時に指導するプログラムです。愛知県立芸術大学（以下：愛知県芸）とソルボンヌ大学（以下：ソルボンヌ）はこれまで、井上さつき教授とマルク・バティエ教授を中心に音楽学セクションの交流がありましたが、2009 年に大学間で協定を結ぶ計画が持ち上がりました。翌年には愛知県芸で正式な話し合いが始まり、2011 年の 5 月に協定が締結され、交流が本格的にスタートしました。

協定の成立を受け、当時博士前期課程の 2 年に在籍していた私に、交流の活性化に向けて学生の目線で調査するという機会が巡ってきました。実のところ、この話をいただいた当初はパリに行くことにそれほど乗り気ではありませんでした。フランス語はまだまだ初級レベル、ドイツ語の方が気合いを入れて勉強していたこともあって、フランス語特有の発音や文法に対する苦手意識は相当のものでした。ただ、学部の頃から興味を持って取り組んでいるテーマが、「ドイツ・バロック音楽の組曲におけるフランス音楽からの影響」だったので、フランス国内での研究の様子も知りたいと感じていました。それならば、大学からの派遣事業として行かせていただけるチャンスに乗るしかない！と思い、まずはソルボンヌに飛び込んでみる決意をしました。

そうして、2011 年 8 月に初のフランス滞在が実現しました。ディジョンのブルゴーニュ大学で 1 か月語学研修を受けた後、新学期に合わせてパリに移り、

4 週間交換留学生としてソルボンヌに在籍していました。この間は、音楽学の中でもバロック時代を専門としているラファエル・ルグラン教授とテオドラ・プシコユー准教授にお会いして論文指導をしていただいたり、大学院の授業に出席したりしていました。また、短い留学期間の中で少しでも多くのことを経験しておこうと、バロック音楽の授業だけでなく 19 世紀音楽の授業にも出たり、フランス国立図書館のカードを作ってリシュリュウ館やオペラ座図書館に出入りしたりしていました。もちろん楽しいことばかりでなく、言葉の壁やとことん個人主義の文化に参ってしまう時もありましたが、帰国する頃には「フランスへの苦手意識」よりも「この国のことをもっと知って、膨大な資料と研究成果の海に身を投じてみたい」と思うようになりました。

2．コチュテルの開始に向けて

その後、2012 年 4 月からは愛知県芸の博士後期課程に進学し、7 月にバティエ先生が来日された時に「コチュテル」について伺いました。その際、「コチュテルとは、一つのテーマに対して、日本とフランスの両方から指導を受けられ、二つの大学で学位を申請できる制度。ただし始めるなら早めに決断しないといけない」と聞き、これは昨年同様チャンスに乗らなければ！と思ってトライすることにしました。それから、バティエ先生、井上先生と相談しながらフランス語で研究計画書を作成し、バロック音楽のルグラン先生に指導をお願いする旨のお手紙を書きました。フランスの博士課程で研究するには何よりも指導教官の同意が得られなければ始まりません。祈るような気持ちで計画書を送り、ありがたいことにルグラン先生から指導承諾のお返事をいただくことができました。

さて、いよいよコチュテルの開始を目指して 2012 年の 10 月初めにパリに渡り、博士課程の学務課に行って必要な手続きについて尋ねました。そうしたら 10 月 10 日までに書類を揃えて出さないと登録の申請ができないとのこと。書類リストを見てみると、日仏の指導教官の推薦書や語学能力の証明書、学部以降の成績証明書・博士課程の在学証明書とそのフランス語翻訳など、実に多くの書類が挙げられていました。その時点で 10 月 3 日、しめきりまであと 1 週間しかありません。当初私は、ベルギー、オランダ、ドイツの図書館へ 2

週間ほど資料調査に行く予定でしたが、急遽日程を変更して途中でパリに戻ってくることにしました。そして、愛知県芸からの書類の受け取り・フランス語翻訳の手配は現地でお世話になっている先輩が代理で行ってくれることになり、期日までに何とか書類を揃えられました。今になれば、外国人の学生がダブル・ディグリーで申請するのですから、証明書の類がたくさん必要になって当然と思うのですが…当時はそうした知恵も働かず、指導受諾のお返事をいただいたこともあってのんびり構えてしまっていました。

そうしてできる限りの書類を用意しましたが、まだフランス語の公的な試験を受けたことがなく、語学能力を証明するものが欠けていました。博士課程で学ぶために要求されるのは CEF (Common European Framework of Languages) が定める C1（上級）レベル。短期留学の際に受けた語学研修は B1 レベルで、当時の私の語学力では C1 に合格するのは至難の業でしたが、とにかく証明を出さなければいけません。そこで、12 月に TCF (Test de Connaisance du Français) を受験することにしていったん帰国し、その後は試験に向けて勉強の日々でした。しかし 12 月の試験結果は残念ながら B2 で、私の願書は語学証明なしの保留扱いになり、2012 年度の登録は叶いませんでした。

それからの約半年、私は C1 取得を目指して TCF を受け続けましたが、いっこうに C1 に届かないばかりか、リスニングなどは点数が下がってしまいました。しかしその間にも、愛知県芸の先生方や事務方で話し合いが進み、コチュテルの開始に向けて体制が整っていきました。私も、たとえ語学が理由でコチュテルが叶わなくても、2013 年の秋からソルボンヌに行くことを決め、ルグラン先生とコンタクトを取ったり、ビザの準備をしたりして出発に備えました。

そして約 1 年ぶりにやって来たソルボンヌ。C1 には届いていないが、この秋からパリで勉強したいと学務課で伝えると、なんと「B2 で良いですよ」と言われ、すんなり登録ができました。その時の驚きと喜びといったら！どうやら、もちろん C1 を取得していることが望ましいが、今後のフランス生活で語学力が向上するという見込みのもと、登録が許可されたようでした。その後学生証が発行され、晴れてソルボンヌの博士課程の学生になることができました。

３．博士課程の学生生活

このような経緯で、ソルボンヌの博士課程１年生として学生生活を送っています。ここで私は、「アムステルダムの楽譜出版によるフランス・バロックオペラ加工の実態」というテーマで研究を進めており、中でもジャン・バティスト・リュリ（1632-1687）のオペラのアムステルダム版に注目し、現在はフランスにある楽譜資料とアムステルダム版の比較を行っています。自分の研究以外では、博士課程・修士課程の授業に出席しています。ソルボンヌの博士課程は学問領域ごとに ED (École Doctorale) というグループに分かれており、音楽学が属する ED 5 には哲学、情報学、言語学のセクションがあります。学生はこれらの領域から２つを選択して講義を受ける必要があるので、私は前期には哲学と音楽学、後期には言語学と音楽学の講義を選択しました。その他にも、ルグラン先生の修士課程のゼミや講義にも出席していますが、全体としては非常に多くの時間を自分の研究に費やすことができます。

このように、研究に没頭できるという意味ではとてもありがたい環境ですが、自宅や図書館に籠りがちになるとフランス人と接する機会が減り、会話の力があまり伸びていかないのが最大の悩みです。フランスは個人主義の国、とよく言われますが、他人の自由を尊重する代わりに「発言しないものは存在しない」と見なす風潮があります。それもあってか皆本当によくしゃべるし、些細なことでも自分の意見をはっきりと言います。私はまだまだフランス人と話すときは１対１でも緊張してしまうし、グループになるとどうしても沈黙してしまいます。パリに来て半年経ち、ただ生活するだけならばフランス語にはあまり困らないようになってきました。だからこそ、これからはフランス社会に積極的に関わっていかないと、会話したり議論したりする力を伸ばすのは今まで以上に難しいだろうなと思っています。

言語と研究とフランス生活…この３つの間で日々試行錯誤しながら暮らしています。分かるのは、コチュテル成立に向けて先生方が力を貸してくださり、双方の大学の学務課がこまめにサポートしてくれたからこそ、今の留学生活が成り立っているということです。このまたとない機会に博士論文を書き上げ、支えてくださっている皆さんに将来恩返しをしたいと思います。

ソルボンヌの研究棟。ここで博士課程の講義が行われるほか、シンポジウムや学会が開かれることもある。